

子育て

日高 實康

いい話

気になる話



子育て
いい話
気になる話

日高
實康

はじめに

「親が日常をどう生き、事ある時にどう立ち向かうかということが、子どもへの最上の教科書である」と津田塾大学の伊藤昇先生は述べておられる。同じような意味の言葉は枚挙にいとまがない。

「子どもは親の後ろ姿で育つ」などは、ごく一般に言い伝えられている代表的な言葉である。

この外、

「父の徳行は、子への最上の遺産なり」——イギリス俚諺

「悪しき父も其の子の悪しきを願はず」——イギリス俚諺

「疑心深き親は狡猾なる子を作る」——ハリバートン

「秀才教育に必要なものは暗示と本である」——オストヴァルト
などなど。

トーマス・チャンドラー・ハリバートン

Thomas Chandler Haliburton
1796—1865

「たいてい、女性の方が悪い場合でも、金切り声を出すと、たちまち女性の言い分が正当になります」の名言で知られる19世紀のカナダの作家。

フリードリヒ・ウィルヘルム・オストヴァルト

Friedrich Wilhelm Ostwald
1852—1932

1909年、触媒作用、化学平衡、反応速度に関する業績が認められノーベル化学賞を受賞したドイツの化学者。

このように、古今東西多くの人々が、自分達の生活経験から得たものを、感動を含めて後世に言い伝えている。

ところで私は、これら一連の言葉の中に共通した教えのあることに気付くのである。それは「子育てとは子どもだけを育てようとするものではない。親も子ども共に育っていかなければならない」

教師に対して、ドイツで最初の教師養成学校の校長ディステル・ウイッヒは「進みつつある教育者のみ、人を教える権利あり」と教え諭している。

人の子の親に対しても、同じように「進みつつある親にのみ、子どもを育てる資格がある」と呼びかけたい。これこそが子育ての決め手であろう。いや、教師や親だけでなく、人間として最上の生き方ではないだろうか。

以上の趣旨をさらに明確にし、理解を深めるために、具体的な子育ての話を集めた。

目次

一	少年院院長の話	6	十二	子どもの悪しきを願うのか	30
二	待合室	10	十三	要領よくする	32
三	坊や汚さないで	12	十四	降りる奴らだよ	34
四	ヘタだわね	14	十五	おばさんが叱るから駄目よ	36
五	放縦	16	十六	お料理ができるかしら	38
六	お母さんは冷たい	18	十七	おかあさん	41
七	昇り口から降りる母親	20	十八	お礼をいいなさい	43
八	怖い、おじいさんだこと	22	十九	母親	44
九	なぜ、うちの子だけ叱るの	24	二十	母親の小鳥当番	46
十	負けちゃだめよ	26	二十一	運だよ	48
十一	この親にしてこの子あり	28	二十二	母子の会話(一)	50
			二十三	母子の会話(二)	52

二十四	あの飛行機買って (一)	54	三十九	感動より	85
二十五	あの飛行機買って (二)	56	四十	拾った石	88
二十六	僕、平気だよ	58	四十一	退屈まぎれ	91
二十七	伝承	61	四十二	運転手が二人いるよ	93
二十八	自信と誇り	63	四十三	感動	98
二十九	叱られた親	66	四十四	この子のこの親	101
三十	謝恩	68	四十五	高尾山の猿	104
三十一	千體地藏堂 正福寺	69	四十六	ゲネプロを鑑賞して	107
三十二	この子は悪い子だよ	71	四十七	夢に生きる	109
三十三	あなたに聞いているんだよ	73	四十八	ヘアー・インディアン族の独自の生き方	111
三十四	老婦人と中学生	75	四十九	寛容と理解	112
三十五	生と死	77	五十	チンパンジーの朝の挨拶	114
三十六	担任のつぶやき	79		座右の銘	116
三十七	信頼と尊厳	81		おわりに	118
三十八	それからどうなるの	83			

* 脚注はWikipediaおよびweblioから引用し、掲載した。

少年院長の話

私がこれから述べる条件を忠実に守ればまず間違いなく少年院に入られる。従って、少年院に入れないためには、この逆を考えてもらいたい。

一、宗教教育および精神修養を、一切打ち壊すこと。

子どもをこのように習慣づけると、子どもは目に見えないものが理解できなくなり、また、信用できなくなる。すなわち、精神的価値（親切・愛情・正義）を大切にしない子どもは、物質のみに執着が生じ、しかも、判断力が身につかないため、万引きや窃盗などの非行に結びつきやすい。

二、法律や制度を無視するように、育てること。

これは、子どもに面と向かつて法律や制度の批判をするということではなく、日常生活の中で、税金の愚痴をこぼす折に、税務署の悪口を言ったり、また、会社や学校の批判を繰り返していると、知らず知らずのうちに、子どもは親の態度、行動、言葉から、「社会の法律や制度は悪いものだ」という意識が身につく。言い換えると、判断力のない子どもに、説明なしに不用意な言葉を使うと、その言葉の意味が、直接的に子どもに受け取られ、将来、その子どもは平気で、法や制度を無視し、非行に走るといふ結果を招く。

三、来客の悪口を言うこと。

来客が帰った後、子どもの前で、必ずその悪口を言っていると、間接的に子どもに排他性と自惚れが身につく。鼻もちならない子どもに育ちやすい。これでは、子どもに親切とか礼儀とかの他人を敬う心が身につくわけがない。少年院に来る少年達の性格としては、自己顕示性あるい

は自己中心性の強いことが特徴である。

四、親の命令には、有無を言わず、絶対服従されること。

これにより、子どもに自分で判断する力を失わせ、奴隸的服従が身につき、すべて上級の者の言うことに服従するようになり、悪の道に引きずられやすい。子どもの理屈には、できるだけ対応してあげ、訳を話してやる親の姿があれば非行化は防げる。

五、子どもの友達を、絶対に家の中へ入れないこと。

これにより、親の目の届かぬ所で遊ぶようになり、子どもの友人関係もわからなくなる。自分の子、他人の子も区別なく、面倒をみる母親のもとでは、よい子が育つ。

六、子どもの言い分を、全部通してやること。

子どもに、欲望を抑える習慣が身につかず、万引きの原因になりやす

く、強盗、強姦を招く原因にもなりかねない。「自分でも、悪いと思うけれども、つい手が出てしまう」というケースが多いのも、これが原因である。

以上、逆説的に述べてきたが、これらのことに十分留意して、健全な子どもを育ててもらいたい。

——多摩少年院院長・副島和穂先生の講演より（昭和四十九年、立川PTA連合会にて）

待合室

小児病院の待合室に院長の配慮によって、幼児のための絵本や童話などの本が置いてある。その本への親子の対応の仕方は、それぞれ違う。

「興味深いですよ」

との院長の話である。

子どもに本を選ばせている母親がいるかと思うと、母親が本を選んで子どもに渡す母親、子どもの読んでいるのを聞いてあげる母親、一緒に声を出して絵本を読む母と子、声を出さずにそれぞれ読んでいる母と子、自宅から本を持参して読んでいる母と子。

読み終わった後や、診療することになったとき、帰るときは、

「また面白い」

と院長は話す。

子どものなすがままにさせている母親、放り投げるようにしていく母と子、一緒に後片付けをする母と子、子どもに整頓させる母親、口うるさく注意する母親、子どもが整理するのをじつと待っている母親、子どもが待合室の中をうろちよろしても注意もせず放任している母親。それぞれの人柄が、よく現れているとか。

日常生活での親子関係は千差万別である。このような生活行動の中から、子ども自身の基本的な生活様式は、形作られていくことに気付かなければならない。そして、子どもの性格形成だけでなく、精神的な面にも深くかかわっていくことを認識すべきである。

坊や汚さないで

タクシーに母子四人が乗り込んできた。

運転手さんは三、四歳ぐらいの男の子が手に持つているシュークリームが気になった。発車しても男の子は指の間からクリームをはみださせながら、喰べていた。若い母親は、おんぶしている子をあやしているが、シュークリームを持った子を注意しようとしてもしない。

運転手はバックミラーをのぞきながら

「坊や、汚さないようにするんだよ」

ところが母親は、

「運転手さんが汚しては駄目と言っているでしょう」

荒あらしく子どもに言うだけで、子どものなすがままにさせていた。

運転手さんはハラハラしながら、落ち着いて運転もできなかつた。

下車することになり、

「運転手さんがうるさいから、早く降りな」

子どもを急がせ、乱暴にドアを閉めた。

後部の座席はシユークリームで汚れていた。

「一事が万事」という言葉がある。このような母親のもとで育っていく、子どもの将来がわかるような気がする。

人に迷惑をかけない、他人の注意に耳をかたむける、社会生活のルールを守る。このことは社会人としての守るべき基本である。

「母の心は、子女の教室なり」——ピーチャー

「子の将来の運命は常にその母の所作なり」——ナポレオン

「親は子どもにとって、最良のモデルだ」

ヘンリー・ワード・ピーチャー

Henry Ward Beecher

1813—1887

アメリカの牧師、奴隷廃止論者、婦人参政権運動推進に貢献した社会改革者。主な著作に『進化と宗教』『イエス・キリストの生涯』などがある。

ナポレオン・ボナパルト

Napoleon Bonaparte

1769—1821

革命期フランスの軍人、政治家。ナポレオン一世としてフランス第一帝政の皇帝。フランス革命後の混乱を取捨して軍事独裁政権を樹立し、イギリスを除くヨーロッパの大半を勢力下に置いたが、最終的に敗北し失脚した。

へただわね

駅の自動券売機に幼児がコインを入れようとしていた。うまくいかずにお金を落としてしまった。

「落としたのね。へただわね。なんべんやっても失敗ばかりするじゃない」

母親は自分で自動券売機にコインを入れ、幼児の気持ちも考えずに、切符を買ってしまった。

悲しい顔をした子どもの様子に、母親は気付かなかった。

このような子どもの正常な意欲を無視した親の行為は、よく見かけることである。

バルーフ・デ・スピノザ

Baruch De Spinoza

1632-1677

オランダの哲学者、神学者。一般には、そのラテン語名「ベネディクトゥス・デ・スピノザ」(Benedictus De Spinoza)で知られる。デカルト、ライブニッツと並ぶ合理主義哲学者として知られ、その哲学体系は代表的な汎神論と考えられてきた。また、ドイツ観念論やフランス現代思想へ強大な影響を与えた。

大事なことは、積極的に物事を考え探求しようとする意欲こそ、子ども
の成長に欠くことのできないことである。さらに考えなければならな
いのは、その意欲の正常な発達である。

「常に求め続けていく人のみが向上する」

「意欲はそのまま善なり、人間は意欲するために発動す」——スピノザ

「汝の運命は汝自身の胸中にあり」——シルレル

ヨーハン・クリストフ・フリードリ
ヒ・フォン・シラー（シルレル）

Johann Christoph Friedrich von
Schiller

1759—1805

ドイツの詩人、歴史学者、劇作家、
思想家。ゲーテと並ぶドイツ古典主
義の代表者。彼の求めた「自由」は
ドイツ国民の精神生活に大きな影響
を与えた。彼の書く詩は「ドイツ詩
の手本」として今なおドイツの教育
機関で教科書に掲載され、生徒らに
よって暗誦されている。

放縦

米屋のおばさんが団地で米の配達をしていた。次に行くので、ワゴン車のエンジンをかけようとして、前を見ると、四、五歳ぐらいの男の子が車の前に立っていた。

「危ないからどきなさい」

と言っても、動かないのである。車から降り、子どもを抱え上げて歩道へ移した。おばさんが運転台に乗って発車しようとする、また、車の前に立っていた。

「どきなさい。車が発車するよ」

と言っても平気である。また車を降りて歩道へ移す、また立ちほだかるを繰り返していた。

見兼ねた近所の主婦が近づいて言った。

「お米屋さん、この子の母親はね『子どもは、自由にのびのびと育てるのが、一番いいんですよ』と言っているんです」

主婦がその子を抱き上げてくれたので、米屋のおばさんは発車することができた。

「自由にのびのびと育てている」と言う、いかにも子育てに理解を示しているようであるが、実際は子どもがままに育てている放縦ではない。その結果は、欲望を抑えることの出来ない子どもになりやすい。凶悪な犯罪を起こす人間の幼い頃の躰けには、このような、わがままに育った事例が多い。

お母さんは冷たい

「うちのお母さんは冷たいよ」

とA子は友達にもらした。それが友達の母親を通して、A子の母親の耳に入り、母親はショックを受けた。

頭が痛いといえば、検温したり薬をのませたり、おなかが痛いといえは、排便の様子を調べるなどの処置をしているのに、どうして子どもは「冷たい」と言うのだろう。母親にはわからなかった。

世話好きで活動的な母親はPTAの役員も引き受けて活躍していた。PTA活動ではうまくまとめ、円満に事が進むこともあるが、なかなかまとまらないこともあった。A子の母親は、このような活動についての話を家庭の中にまで持ち込むことが多く、そのためどうしても愚痴

をこぼすことが多くなった。

ある日、

「こんなな気をつかっているのに、みんな協力してくれないのだから」と母親の愚痴が始まった。その話を聞いていた高校三年の長女がさりげなく、

「お母さんは気をつかうけど、心はつかわないものね」

と言った。

母親はA子の発言と重複して頭をよぎるものがあった。

気はつかうけど、心はつかわない。表面だけをとりにつくろっている自分に、母親はまだ気付いていないようだ。

昇り口から降りる母親

駅の階段には「昇り口」とか「降り口」の札が下がっている。そこへ、四、五歳ぐらいの子ども連れだ若い母親が通りかかった。

「坊や、これ読んでごらん」と指さして言った。

「昇り口」

と子どもが答えた。

「よくわかったわね」

と言いながら、平気でそこを降りていった。

このような言行不一致の行為は、日常生活の中にはないだろうか。特に日常生活の中で旺盛なまでに何でも吸収しようとする幼児の前では、

よい結果は得られないだろう。

重要なことは、決まりを守らない行動である。「決まりを守る」生活
をすることが、社会人としての第一歩である。

怖い、おじいさんだこと

電車の中で、小学一年ぐらいの女の子が靴も脱がず、後ろ向きに腰かけた。その前に立っていた初老の人のズボンに泥のついた靴が当たったので、その人がその子に注意した。

すると隣に座っていた若い母親が、

「怖いおじいさんだこと」

と言って不快な表情をした。

人に迷惑をかけないことが、社会人としての第一歩だ。「失礼しました」と言える子どもに育てるよい機会だったのに。この行為に母親の手柄が滲み出ているように思う。

「品行は己が姿を現はす鏡なり」——ゲーテ

ヨハン・ヴォルフガング・フォン・
ゲーテ

Johann Wolfgang von Goethe
1749—1832

ドイツの詩人、作家。「若きウエルトルの悩み」などで、シユトウルム・ウント・ドラング（疾風怒濤）運動の旗手として活躍。十年間、ワイマール公国で政務を担当。のちイタリア旅行の体験などを通じて、シラーとともにドイツ古典主義を完成。また、自然科学の領域でも業績をあげた。

なぜ、うちの子だけ叱るの

中学一年の男の子が万引きをしたので、母子を学校へ呼んだ。学校側では万引きが頻発していることもあって、事情を詳細に問いただしていた。初めは神妙に対応していたが、突然

「俺だけじゃないよ、いつも俺だけ叱るんだから」

と抗議した。

母親も子どもと同じ口調になって言った。

「うちの子は、そんなに悪い子じゃないです。友達が悪いのですよ。すぐうちの子のせいにしてはこまります」と。

母親の抗議に勢いを得た子どもは、学校側の指導に反発して黙りこんでしまった。この子の非行癖は、対抗意識の強い常識のない母のもとでは、矯正はできないだろう。子どもの非行癖は背後に、この母親ありと
いうことだろうか。

負けちゃだめよ

「お友達に負けちゃだめよ」

ある母親の日頃の口癖である。なんでも人に負けたくない勝気なお母さん。幼い子どもも、この母親の言動をすっかり身につけてしまったようだ。

「お母さん、今日のテスト七〇点だったよ」

と算数の答案用紙を差し出す。

「Tちゃんはね、五〇点だったんだよ。いいでしょう」と子どもは誇らしげである。

「だめよ、七〇点じゃ、一〇〇点取りなさい」

と母親は責めたてるのだった。

子どもにとって最も大事なことは、学ぶ喜びを持たせることだ。成績はその次。

「お友達に負けちゃだめよ」と言う母親のもとでは、子どもは勉強嫌いになること請け合いだ。学ぶ喜びを共有する母親でありたい。

「友人との競争心からは、真の勉強好きは生まれない」